

## インシデントレポートからみた急性期病院における転倒・転落事例の発生状況の分析

2018年度から2020年度に報告された転倒・転落のインシデントレポート1,018件のうち、外来で発生した症例や重複報告された症例を除外した995件を対象に、転倒率（転倒件数／入院患者延数×1,000（件/1,000患者・日））を用いて背景要因を検討した。

患者の平均年齢は男性74.4±16.4歳（595件）、女性76.5±14.6歳（400件）であった。性別と転倒の有無の独立性を検定したカイ二乗検定によれば $\chi^2(3)=38.88$ （*p*値0.00）であり、転倒するかないかは性別で差がみられ、男性は女性より転倒しやすいことが示された。3年間の平均転倒率は2.32件/1,000患者・日であった。また、年代別では、90歳代が5.08件/1,000患者・日（69件）でもっとも高く、高齢者ほど高い傾向にあった。さらに診療科別では、外科系では乳腺内分泌外科が1.21件/1,000患者・日、内科系では循環器内科が2.41件/1,000患者・日でそれぞれ最低であり、外科系では脳神経外科が6.24件/1,000患者・日、内科系では神経内科が5.57件/1,000患者・日でそれぞれ最高であった。したがって、外科系より内科系診療科の転倒率が高い傾向があり、脳疾患に関連する診療科は外科系でも内科系でも転倒率が高いことが示された。

転倒率を目的変数とし、説明変数を手術件数、75歳以上の患者の割合、平均在院日数とし、変数を、*Z*変換して回帰分析を行った。その結果、転倒率は手術件数と75歳以上の患者の割合、平均在院日数によって5割程度説明できた。また、手術件数の係数は有意でなく、75歳以上が占める割合の係数は有意水準10%で有意で符号はプラスであり、平均在院日数の係数も有意水準10%で有意で符号はプラスであった。さらに、それぞれの説明変数の貢献度は75歳以上の後期高齢者の割合43.0%、平均在院日数41.1%、手術件数15.9%の順であった。

入院から転倒発生までの日数における転倒率について、入院翌日が0.21件/1,000患者・日（90件）で最も高く、次いで3日目が0.15件/1,000患者・日（68件）が多かった。入院8日目までに発生した転倒は、全報告数の50.2%を占め、その後は増減を繰り返すが、全体的に減少していった。入院から転倒発生までの平均日数は15.0日であった。

転倒による影響度3b以上の傷害が発生した35事例のうち9例（25.7%）は入院期間が平均27.1日（標準偏差31.7日）延長となっていた。入院期間の延長に伴う追加医療費は713,130円発生していた。

以上の分析の結果、転倒率に影響を与える診療科や、入院後に転倒を起こしやすい期間に合わせた予防策を実施していくことが重要であると言える。